

◆水落遺跡の調査 — 第9次・1995-1次

1 水落遺跡第9次調査

はじめに

漏刻台とこれを方形に囲む廊状建物を中心区画とする水落遺跡について、本年度は、その外郭施設の検出を主目的に、昨年度の第8次調査の南隣接地において調査をおこなった。調査面積は533㎡である。

基本層序

上から順に、耕作土、床土、炭混り褐色砂質土（平安時代遺物包含層）、茶褐色土混褐色砂または茶褐色微砂、暗褐色微砂（古墳時代遺物包含層）であった。茶褐色土混り褐色砂または茶褐色微砂の上面で平安時代などの遺構を検出し、暗褐色微砂上面で7世紀代に属する遺構を検出した。

遺構

検出した遺構は、時期別にみると、7世紀代に属する掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物、掘立柱塀、合口土器棺墓、中世以降の耕作にともなう素掘溝など、おおよそ3期に分けられる。

7世紀の遺構 掘立柱建物SB3700は規模の大きな東西棟建物で、桁行4間（柱間3.08m等間）、梁間3間（柱間2.67m等間）の身舎に、調査区内では南・東・北に庇がつく。庇の出はいずれも2.67mである。西面は調査区外にあるが、西にも庇があって四面庇建物になるであろう。柱掘形の平面の形状は一辺1~1.8mの方形で、現存の深さは約0.7~1.1mある。柱はすべて抜き取っていた。抜取穴は、不整形で、掘形内におさまるものが多い。柱掘形の埋土は茶褐色砂質土や礫混り暗褐色砂質土などで、抜取穴の埋土は褐色砂質土などであった。建物の方位は、柱根や痕跡によら

いので正確を期しがたいが、方眼北に対して東に40分前後振れる。

平安時代の遺構 掘立柱建物SB3703は、調査区東側にある南北棟建物で、桁行3間（柱間2.3m等間）、梁間2間（柱間1.85m等間）である。この東に柱筋が平行な3間の掘立柱塀SA3710がある。柱間は2.2m前後である。

掘立柱建物SB3707は、西側にある東西棟建物で、桁行4間（柱間2.38m等間）、梁間2間（柱間1.8m等間）である。南側にやはり東西棟の掘立柱建物SB3706がある。桁間3間（柱間2.07m等間）、梁間2間（柱間1.6m等間）である。この建物は総柱構造である可能性もある。

SB3707の北側には3間の掘立柱塀SA3709があり、柱間は2.37m前後である。目隠塀と推定される。

SA3709の西の柱の間、南側において合口土器棺墓SX3708を検出した。掘形の形状は、南北に長い楕円形

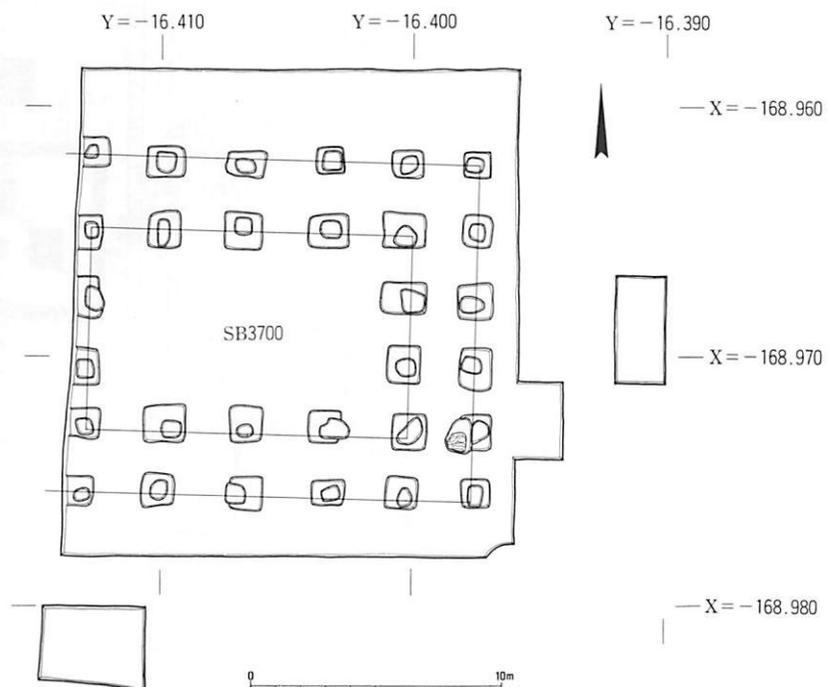


図36 水落遺跡第9次調査遺構図（下層）1：300

で、長軸約0.48m、短軸約0.36m、現存の深さは約0.1m。ここに口縁部を合せた甕2個体を南北方向に、横倒しに据えてあり、北側の甕内部には直径約14cmの土師器皿が甕の底面に添うようにおいてあった。棺内には、それ以外に遺物はなかった。

遺物

土器、瓦、金属製品、石製品などが出土している。

土器のうち最も多いのは、古墳時代に属するものである。そのなかには、縄叩き文の陶質土器のほか、格子叩き文などをもつ軟質の韓式土器も含んでいる。7世紀代の土器類はきわめて少量である。

軒丸瓦は、飛鳥寺V型式3点の他、同VIII・XIV・XV b各1点がある。軒平瓦は出土しなかった。

金属製品としては、鉄鏃・鉄釘などが、石製品では、石帯が出土した。

まとめ

本調査区において規模の大きい建物SB3700が見つかった。上述のように、遺構の重複や、7世紀代の出土遺物はきわめて少ないので、この建物のこまかな所属時期を決定することはむずかしい。

そこで、いま建物の方位によるとすれば、その振れは、方眼北に対して東に40分前後である。この方位は、石神遺跡と水落遺跡を区画する大垣SA600や水落遺跡第7次調査区石組溝SD3400、さらに石神遺跡A期（斉明朝）の



図37 合口土器棺墓SX3708（東から）

うちA-1期からA-3期の古い段階にかけての諸施設群に一致する。

一方で、水落遺跡の礎石建物を含む中心区画は方眼北に対して西に約40分振れている。この違いを重視して、いまはSB3700を漏刻台などの中心区画に先行して建てられた建物としておきたい。

今回の調査と、第7・8次調査（『藤原概報25・26』）の成果をあわせると、水落遺跡においては中心区画の建設にともなって、その南50m以上にわたる範囲に建物や堀といった地上構築物を新たに建設した形跡はないことになる。

また、水落遺跡の南を画す堀は未検出である。外郭施設を含めた空間利用の実態の解明については、なお今後の調査の進展に委ねねばならない。（深澤芳樹／考古第1）



図38 水落遺跡第9次調査遺構図（上層）1：300 色刷りは下層

2 水落遺跡1995-1次調査

はじめに

この調査は、高市郡明日香村大字飛鳥地内について明日香村が行う下水道埋設事業にともなう事前調査の第1年次の調査である。

調査は、前年までに検討されたルートと順序にしたがっており、今年度は飛鳥寺寺域北辺から石神遺跡、水落遺跡にいたる全長430m間に必要とされる合計12箇所の竪坑予定地について、遺構の存否を確認し、ルート確定の資料を得る目的で実施した。

遺構

調査地は東からN-1・2・3・4、U-1・2・3・4、P-1・2・3・4と呼び分けた(図35)が、このうちN-3・4とP-4については事業者側の都合で調査を見送った。なお、ここでのN、U、Pはそれぞれ飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設定した飛鳥藤原地域の調査地区割の5AMD-N、5AMD-U、5AME-Pの中地区名であり、以下、各調査トレンチ毎に概述する。

N-1トレンチ 1982年に調査された飛鳥寺東北隅(飛鳥寺1982-1次調査『藤原概報13』)の東約15mの東西里道上に、東西3m、南北2mの調査区を設けた。道路敷直下で、北3分の1については近年の水路工事によって破壊されていることが判明し、南についても地山岩盤とバラス層を確認しただけで遺構は検出されなかった。

N-2トレンチ 飛鳥寺寺域東北隅の西40mに位置する東西里道上に1×1mの調査区を設けた。層序は上から道路基礎、暗褐色土、茶褐色土、茶褐色粘質土、褐色土、褐色土上半に軒丸瓦(飛鳥寺I型式)1点などの遺物が少量含まれるだけで、それ以下は地表下約2mまで無遺物層が続く。この高さは東北隅検出時の遺構面をこえており、調査区内では遺構は確認されなかった。

U-1トレンチ 1977年に飛鳥寺寺域北限塀と北門及び外濠を検出した調査区(飛鳥寺北方の調査『藤原概報8』)の西北に隣接する東西里道上に、東西3m、南北2mの調査区を設けた。層序は上から道路基礎、暗褐色土、暗茶褐色土、茶褐色土、褐色土である。上面から0.7~0.9mの褐色土面で遺構検出をおこなった。黄褐色粘質土を埋土とする土坑2基を検出したが、外濠は検出されなかった。土坑はともに東西に長く、調査区の中程でとぎれ

て東には延びない。土坑の方向は西で南に傾く方向にある里道に平行しており、寺域北限の塀や外濠の方向とは一致しない。土坑からは少量の瓦と土器が出土した。褐色土面は東から西へ下降し東半は比較的浅いが、そこでも寺域北外濠は検出されなかった。1977年の調査では外濠は調査区の東7mの位置で北へ折れ曲っており、本調査区は北門から北へ延びる通路の上に位置するものと考えられる。

U-2トレンチ U-1トレンチの西約30mに1×1mの調査区を設定した。層序は道路基礎、暗褐色土、暗茶褐色土、茶褐色土、褐色土で、道路面下1mの褐色土上面で小穴1を検出した。小穴は直径60cm程の不整形で、少量の土器が含まれ、弥生時代の遺構と思われる。外濠状の遺構や堆積土は認められなかった。

U-3トレンチ 飛鳥寺北門から西へ15mの東西里道上に東西3m、南北2mの調査区を設定した。層序は上から、道路基礎、灰褐色土、茶褐色砂質土、灰褐色粘質土、暗灰褐色砂質土である。暗灰褐色砂質土面で北へ緩やかに下降する東西溝を検出。幅1.5m以上、深さ0.4m以上。埋土は上層の褐色粘質土と下層の暗灰褐色粘土に分けられ、溝からは少量の瓦と土器片が出土した。溝の南岸には直径60cm大の楕円状の穴が5基あり、護岸の石の抜取穴とみられる。位置と規模から、この東西溝は飛鳥寺の北面外濠と考えられる。

U-4トレンチ 石神遺跡第1次調査区の東南角の里道交点に1×1mの調査区を設定。この里道交点は飛鳥寺の西面大垣の北延長上にあり、寺域北西隅に位置すると推定されている。層序は道路基礎、茶灰褐色土、青褐色粘土斑入り灰色砂層、灰褐色粘質土、淡灰褐色微砂質土、砂礫、暗褐色粘質土、青灰色土である。地表下1.1mの灰色砂層は瓦と近世陶器が含まれる旧水路堆積層で、地表下1.4mの灰褐色粘質土以下は西に下降する旧流路の堆積層にあたる。調査は地表下1.6mの深さまで到ったが、第1次調査区の黄褐色粘土の地山は確認されなかった。

P-1トレンチ U-4トレンチの西約36m、石神遺跡第3次調査区の東端付近に南接する東西里道上に東西3m、南北2mの調査区を設定した。第3次調査で検出した東西棟建物の南に石敷や建物があるかどうかは課題であった。層序は上から、道路基礎、黄灰色土、暗灰褐色砂礫土である。地表下0.9mにある暗灰褐色砂礫土上面で中世

の東西素掘溝1条を検出した。素掘溝以南は黄色粘土の入った暗褐色粘土が広がり、それを埋土とする東西溝状の土坑と判断された。なお、土坑には石神遺跡第3次調査の溝SD576に特徴的な白色粘土塊が含まれる。素掘溝以北では東から、暗褐色粘土を埋土とする浅い円形土坑、灰色粘土混りの砂礫を埋土とする一辺0.6mの柱穴、礫混りの灰色粘土を埋土とする一辺1.3m以上の大型柱穴各1基を検出した。しかし、周辺での調査成果と対照しても建物などにはまとまらなかった。

P-2トレンチ P-1トレンチの西約40mのT字路交差点に、1×1mの調査区を設定。石神遺跡第3次調査区の西南部で、水落遺跡の東北部にあたり、漏刻関連施設全体に及ぶ掘込地業の北端が想定される位置である。層序は、上から道路基礎、石炭殻層、青灰褐色土、黄灰色砂質土・暗灰褐色微砂土である。地表下0.8mの黄灰色砂質土面で遺構検出した結果、南半に暗茶褐色土が広がり、その下は淡灰褐色粘質土と暗褐色砂質土の互層からなる積土層であった。この積土層は深さ0.3mしか確認していないが、1985年の水落遺跡第5次調査（『藤原概報16』）で確認した掘込地業埋土と類似し、また、この位置が礎石建物の基壇北縁の北約12mにあつて、基壇南縁から掘込地業南端までの距離と等しいことから、全体におよぶ掘込地業の北端にあつると判断された。

P-3トレンチ P-2トレンチの南約45m、史跡水落遺跡の整備地の東を通る南北村道上に南北5m、東西2.2mの調査区を設定。調査区の西側では1982～86年の第2～6次調査（『藤原概報12・16・17』）、東側では1994年の第7次調査（『藤原概報25』）が行われており、その成果から調査区内で掘込地業の南端が検出されることは確実であった。ただ、第7次調査ではA期の東西堀とB期の東西溝が検出されておらず、その存否の確認が課題であった。

層序は基本的には道路基礎、黄灰色土、赤褐色土、暗灰褐色砂質粘土、暗灰色砂質土、明褐色砂である。暗灰褐色砂質粘土には9世紀の黒色土器片が含まれ、赤褐色土と暗灰褐色砂質粘土は遺跡中核部の調査時の「褐色砂質土」に相当する平安時代の遺物包含層である。その下面での遺構検出の結果、北半に東西方向に積土の縞が認められ、掘込地業の上部にあつると判断された。掘込地業埋土は上から暗茶灰色粘質土、暗灰褐色微砂土、明黄灰色砂、黄灰色砂で厚さ5cm程の互層をなす。深さ40cmま

で確認したが、従来の所見と変わらない。埋土からは7世紀前半代までの土師器、須恵器が少量出土した。

掘込地業の南には地山である明褐色砂の上に暗褐色砂質土が広がる。この砂質土には7世紀代の遺物が少量含まれ、掘込地業と同時期の周辺部の整地土と考えられる。調査区南端にある礫の入った柱穴①、東西溝、暗灰色粘質土の柱穴②とその柱抜取穴はその上面で検出された。柱穴①は一辺60cm以上の規模で、柱間2.1mにある柱穴③とともに暗紫色の焼土が含まれる特徴があり、その点で第7次調査の掘込地業南端に接して検出した柱穴SX3414と酷似している。柱穴③はこのSX3414の真西約5mに位置し、柱痕跡が平安時代の遺物包含層中で確認されることから平安時代の柱穴と考えられる。東西溝は第6次調査のSD296の東延長部で幅0.9m、深さ30cm以上。柱穴②は第6次調査の東西堀SA295の東延長部で、掘形、柱抜取穴が東西溝とほぼ重複して見極めにくい点も第6次調査の所見と一致している。

以上のように、掘込地業の南端については当初の想定通りの位置で確認され、A期の東西堀とB期の東西溝については第6次調査での所見を再確認することになった。先述のように溝と堀とは東の第7次調査では検出されておらず、溝はこの位置で南に曲がり、堀は南に曲がるか、東西棟建物の北側柱列となるものと考えられる。

出土遺物

土器、瓦、土製品、石製品が少量ある。土器は、P-2・3の掘込地業埋土出土の土器類を含めて極めて少量で、いずれも遺構の時期を決定する資料としては貧弱である。瓦は、整理箱20箱分の丸・平瓦のほか、軒丸瓦飛鳥寺I a型式3点、XIV型式2点、軒平瓦III型式（四重弧紋）1点がある。

まとめ

U-1では、飛鳥寺北門関連の遺構面を確認し、U-3では寺域北限の外濠とみられる石組護岸のある東西溝を確認した。P-2・3では、水落遺跡の掘込地業の北端と南端を確認した。その位置は従来の調査成果から復原された通りの位置であつて、復原は正鵠を射たものであろう。復原にしたがえば、南北村道上には、水落遺跡の掘込地業をはじめとする遺構が遺存し、P-3の南についても石組溝や木樋暗渠が延びていることは確実である。

（西口壽生）